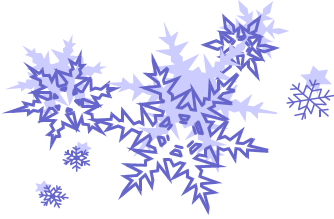


説教要旨「律法と愛」



マタイによる福音書5章17～20節

キリスト教の歴史の中で、『イエス様の十字架によって新しい契約が結ばれたいま、もはや古い契約について記された書物など必要ない。』という人がしばしば現れました。このような主張がまかり通るならば、『新約よりもさらに新しい契約が結ばれた。』と言って新たな救い主を自称する教祖も現れてくるでしょう。そんな、ご都合主義の『神の御心』がまかり通るところに、私たちの救いはあるはずがないのです。確かにイエス様の十字架によって、神様と私たち人間との間に新しい契約が結ばれました。けれども、そのことによって古い契約が間違っていたということにはならないし、必要なくなったということでもないのです。古い契約によって成し遂げられなかった神様の御心を成し遂げるため、律法を完成する者としてイエス様は来られたのです。

神様から与えられた律法は、それを解釈してそれを実行する時、自分の都合を優先したり、体裁だけを整えて、形式上それを守っていればそれでよいこととされるようになっていきました。律法学者やファリサイ派の人たちは、日常の隅々まで律法に従った生活にするために、規則の上に規則を作り、その規則をひたすら守る生活をしていました。しかし、イエス様は彼らの思い上がりを指摘するのです。『あなたがたのやり方では天の国に入ることは決してできないのだ』と。そして、イエス様はその生涯、とりわけ十字架上の死によって、私たちの一切の罪をその身に負うというあり方で、罪人を救うという神様の御心を体現されたのです。それは、天の国に入ることなどとうてい叶わないはずの私たちを憐れに思い、なんとかして天の国へと招き入れようとしてくださる神の愛です。そしてこの愛によって初めて、律法は完成するのです。

聖書の言葉は、その言葉を通して神の愛が、神の栄光が表されて初めて完成するものです。ただ聖書の言葉にそのまま従っていればよいならば、どれほど楽だったでしょうか。しかしイエス様はそんな楽な道を歩もうとはされず、やがて十字架に至る過酷な愛の道を歩み続けられたのです。